

第33回全道商工会議所女性会研修交流会

日時：令和元年9月20日（金）
研修交流会／午後3時
懇親会／午後5時30分

場所：グランドパーク小樽

全道の女性会会員が一堂に集まり、情報交換や研鑽の場とする、全道商工会議所女性会研修交流会を小樽市で開催し、全道18女性会から173名が参加しました。研修交流会では活動指針提唱や、研修会の報告発表を行った後、小樽商科大学の高野宏康学術研究員による記念講演を行いました。



懇親会では寿司や地酒で小樽の食を提供した他、ゴスペルグループ「小樽 Sea of Grace」によるコンサートで会場が一つになって盛り上がりを見せるなど、各地女性会との交流を深めました。

次回は森町で開催される予定です。

第33回全道商工会議所女性会研修交流会 記念講演

テーマ「歴史文化を活かした観光まちづくり

—日本遺産で創る小樽の未来—

講師

国立大学法人小樽商科大学グローバル戦略推進センター学術研究員

高野 宏康氏

日本遺産は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するもので、小樽市ではこれまでに2件が認定されています。平成30年5月に日本遺産ストーリー「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」に小樽市が追加認定され、全国45市町の寄港地と連携し、地域間交流や活性化を目的に活動しています。江戸・明治時代の小樽は、北海道と関西方面を結ぶ北前

船の寄港地の物流拠点として生活物資や文化が運ばれ、膨大な利益をあげていました。ストーリーにまつわる構成文化財には日和山灯台や旧魁陽亭（ひよりやま）などが含まれています。

また、令和元年5月には「本邦国策を北海道に見よ！」北の産業革命炭鉄港（たんでつこう）が日本遺産に認定され、空知の石炭、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾を鉄道というテーマで結び、人や知識の新たな動きを作り出そうとする取り組みが行われています。国内初の本格的港湾整備である小樽港北防波堤、手宮線跡などの鉄道遺産

や、新鮮な魚介類をブリキ缶に入れ鉄道で産炭地へ売り運ぶ「ガンガン部隊」の拠点地であった小樽中央市場などが構成文化財に認定され、空知・胆振地方と連携した施策に取り組んでいます。

○小樽の発展と衰退

明治時代の小樽は、北前船によるニシン粕の輸送や石炭の積出港としての役割と、樺太や朝鮮半島との国際貿易港として発展し、日本の近代化を支えてきました。しかし、ニシンの不漁や価値の低下、エネルギー資源や運搬手段の変化に伴い、経済都市の中心が札幌に移行するなど、1960～70年代の日本の高度経済成長に伴い小樽の街は衰退し、斜陽の街へと変わっていき

○運河保存運動から観光まちづくりへ

小樽港が北海道開拓の玄関口として発展したことにより小樽



運河が造られました。昭和40年代に埠頭岸壁が整備されると小樽運河の役割が終焉を迎え、運河埋め立て派と、運河保存派による運河保存運動で小樽が経済都市から観光都市へと生まれ変わるきっかけとなりました。

1986年には小樽道道臨港線が完成、運河の半分を保存した事で、運河周辺の古い倉庫群を活用した観光まちづくりの世界的な先駆けとなりました。

また、この頃から小樽の名物

を作る動きが高まりました。今では寿司屋通りとして観光名所になっている「寿司屋通り会」を設立、20店舗ほどの加盟店から現在では100店舗以上が軒を連ね、「小樽の名物は寿司」として定着しました。

さらに、小樽のソウルフードとなった「あなか焼そば」の歴史は古く、昭和30～40年代の市民は買い物帰りに、中華の名店であなか焼そばを食べる習慣があり、その記憶をまちづくりに生かそうと2012年に「小樽あなか焼そば親衛隊」が設立されました。

小樽はレトロな街として定着していますが、かつて経済都市だった頃の豪勢な建物があちこちに残されており、「急激に成長し衰退した街」であったことがわかります。

○歴史文化を活かして創るまちの未来

北前船が日本遺産に登録されたことを市民に周知するため、



小樽商科大学の学生が商店街の空き店舗を活用し「北前カフェ」を運営、北前船をモチーフにしたスイーツなどの販売を行った他、北前船主の倉庫であった建物が観光地の土産店として活用されています。

日本遺産を通じた広域連携による歴史文化の掘り起こしが、新たな発見につながります。歴史や文化の視点から、小樽の魅力が北海道全体の再発見につながると考えています。